

## 「進路選択に対する自己効力」についての分析 -自己効力感の低い学生に着目して-

浦上昌則（南山大学人文学部）

### 概念説明と本分析の目的

「進路選択に対する自己効力」という概念は、進路を選択することに関する幅広い行動について、それを行う自信の程度を表している。この概念は、日本のみならず海外でも注目されており、多くの結果が蓄積されている。そしてこの自信の程度が高い者ほど、積極的に、また継続的にそのような行動を行うことが明らかにされている。

この概念を用いる場合に留意すべき点は、まずこれらの項目は、目標選択、自己認識、職業情報の収集、将来設計、課題解決という5つの領域の内容から構成されているという点である。そのため、得点は幅広い内容を包括した点数となる。もう一つは、一般的に「就職活動」とよばれる行動と直接的に対応はしていないという点である。就職活動は、進路を選択するための多種の行動の一部として位置付けられるが、「進路選択に対する自己効力」は、就職活動を含むより大きな概念である。そのため、就職活動をどの程度行うかということはもちろん、低学年時における、将来的にキャリア選択にかかわるであろう活動に対する自信をも測定していると考えられる概念である。

この概念はアメリカで提唱されたものであるが、進路を決められないという状況に陥る理由の説明と、援助的介入を目指して導入されたものである。進路を決めるためには、意思のレベルでも行動のレベルでも、何かをしなければはじまらない。それをしない（できない）のは自己効力感の低さが原因であり、換言すれば、自己効力感に介入できれば進路を決められないという状況に陥ることを防げるという理論的背景をもつものである。

本分析では、特に自己効力感の低い学生の姿を、その他の学生との比較を通して明らかにしてみたい。

### 「進路選択に対する自己効力」(Q30)の得点と群分け

自信があるほど高得点になるように点数化し、全対象者(N=2,013)の平均を求めたところ、78.78点(SDは14.95)であった。得点の範囲は、すべての項目に

「まったく自信がない」と回答した場合は 30 点、「非常に自信がある」と回答した場合は 120 点となる。その中間が 75 点なので、この平均値は「まったく自信がない」と「非常に自信がある」の中間よりも少し自信がある程度を示している。

学年および性別に平均値を算出すると、1 年生男子(N=512)は 78.40 点、1 年生女子(N=476)は 77.69 点、3 年生男子(N=563)は 79.50 点、3 年生女子(N=462)は 79.44 点であった。若干ではあるが、1 年生よりも 3 年生の方が得点が高いが、性差はほとんどないといえよう。

次に、この得点を用いて、対象者を 3 群に分類した。この尺度の選択肢は、「まったく自信がない」、「あまり自信がない」、「少しは自信がある」、「非常に自信がある」の 4 段階である。すなわち、すべてに「あまり自信がない」と回答した場合は 60 点、「少しは自信がある」と回答した場合は 90 点になる。得点の分布状況を考慮すると、かなり多くの対象者は 60 点から 90 点の間に位置し、59 点以下、91 点以上は少なくなるという特徴を示していた。

そこで、59 点以下を自己効力感の低い学生 (144 名, 7.2%)、91 点以上を高い学生 (349 名, 17.3%) として抽出した。残りの 60 点から 90 点は中位の学生とする。なお、性別、学年別でも得点の分布状況はあまり違わないため、どちらの性、もしくはどちらの学年でも 7%程度は自己効力得点が 59 点以下の学生が含まれる。

#### 所属の別と自己効力感

学生の所属校別 (国立・公立・私立) (F2\_4) に検討したところ、国立の場合 6.5%、公立の場合 5.1%、私立の場合 7.6%が低位群であった。この点においては、大きな差は無いといってよいであろう。次に、文理系別 (F3) に検討したところ、低位群は、文系の場合の 8.0%が最も多く、次いで理系の場合の 6.4%、文系でもあり理系でもある場合の 4.9%という比率であった。他方高位群は、文系でもあり理系でもある場合の 20.8%が最も多く、文系の場合の 18.2%、理系の場合の 15.6%と続いている。この結果から、文理系と自己効力感の間には相互作用が考えられる。

所属する学部、学科、コースの学習内容が職業にどの程度関連するかという程度 (F4) ごとに自己効力感を検討したところ、図 1 のような結果が得られた。

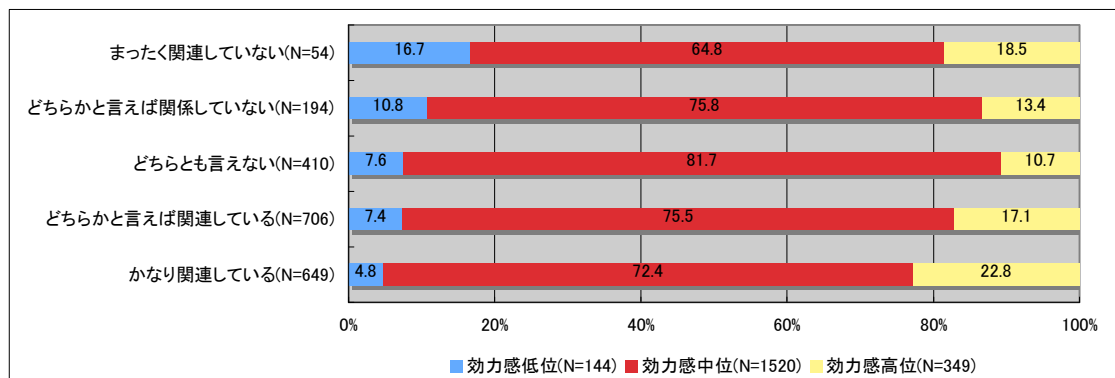


図1 学習内容と職業との関連性の程度別(F4)にみた自己効力感(N=2,013)

低位群の含まれる割合は、「かなり関連している」ところに所属している場合が最も少なく(4.8%)、関連の程度がうすくなるに従って割合が増加し、「まったく関連していない」場合には16.7%が含まれるという結果であった。ところが、高位群の割合は低位群と対応していない。このため、学習内容が将来の職業と関連がうすい場合、所属する学生の自己効力感が低いとは一概にいうことはできない。所属する場での学習内容が将来の職業と関連がうすいほど、両極の学生が多い傾向があるという点は留意すべき特徴であろう。

#### 自己効力感に関する仮説の確認

最初にも述べたように、「進路選択に対する自己効力」は、進路を選択するための幅広い行動に対する自信を測定している。そしてその程度は、実際の活動に影響すると仮定される。そこで、今回測定されているインターンシップ(Q10\_1)やキャリア形成支援企画(キャリア形成科目(Q16\_1)および、キャリア形成支援のためのセミナー・講座(Q17\_1))への参加、就職相談に関する指標(Q18\_1)を用いて、自己効力感の高さと行動との関係を検討する。なおインターンシップについては、大学入学前と入学後の2つの設問があるが、この分析では入学後の回答(Q10\_1, (2))を用いた。これらに対する回答を、学年別、自己効力感の群別に整理したところ、以下に示す図のような結果であった。

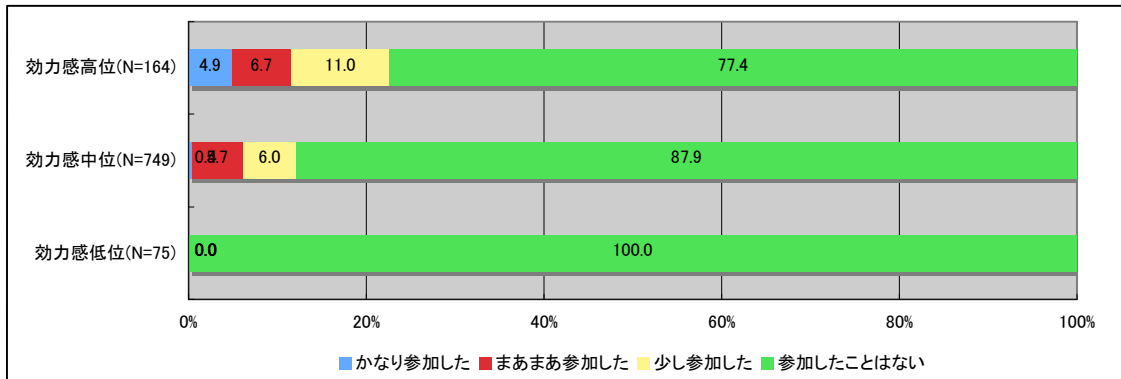


図2 インターンシップ経験（1年）（N=988）

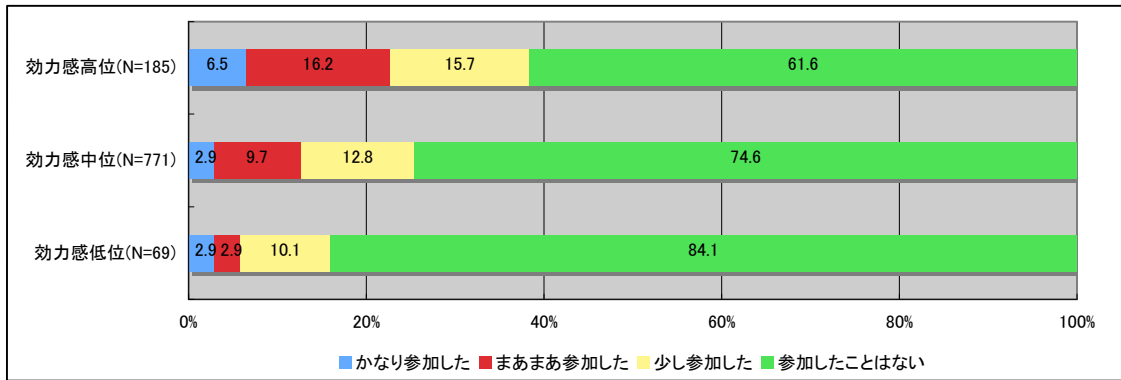


図3 インターンシップ経験（3年）（N=1,025）

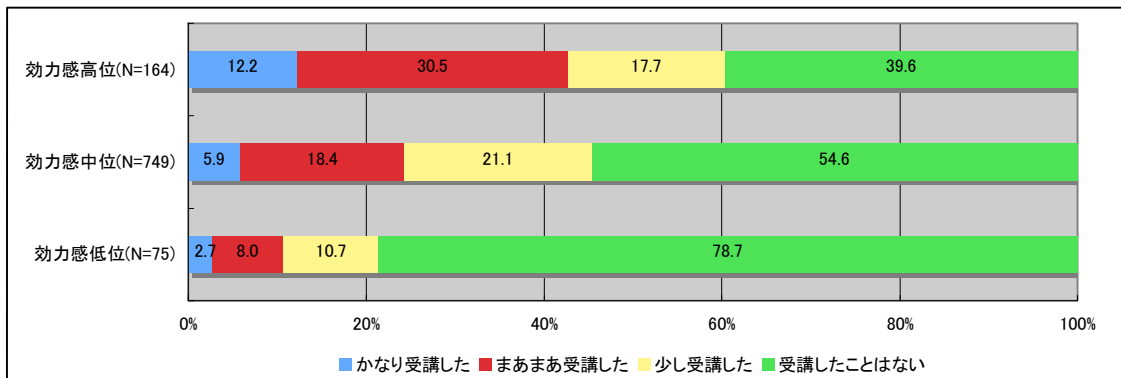


図4 キャリア形成科目の受講（1年）（N=988）

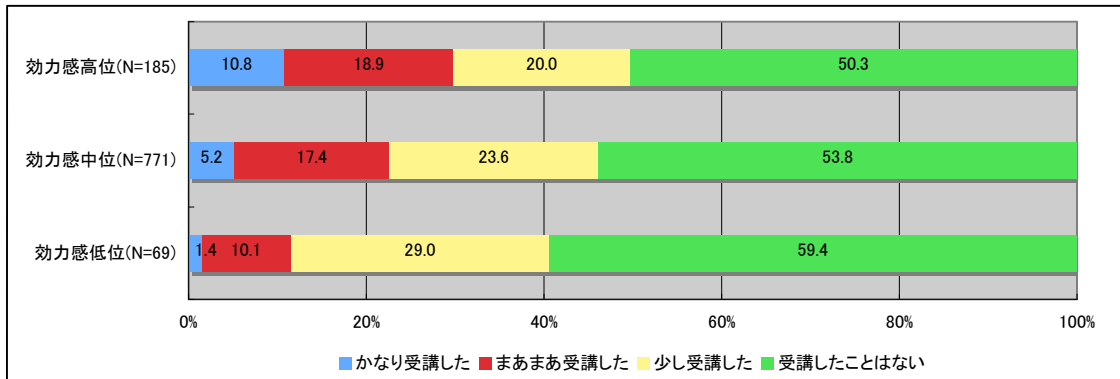


図5 キャリア形成科目の受講（3年）（N=1,025）

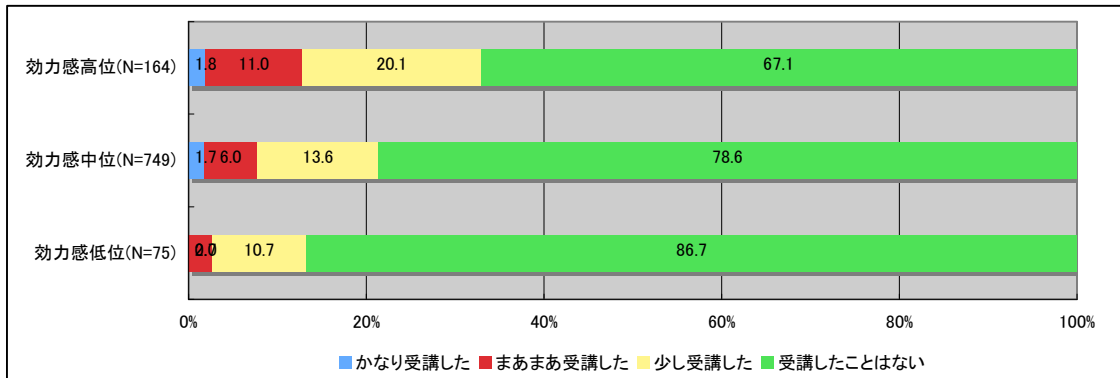


図6 キャリア形成支援のためのセミナー・講座の受講（1年）（N=988）

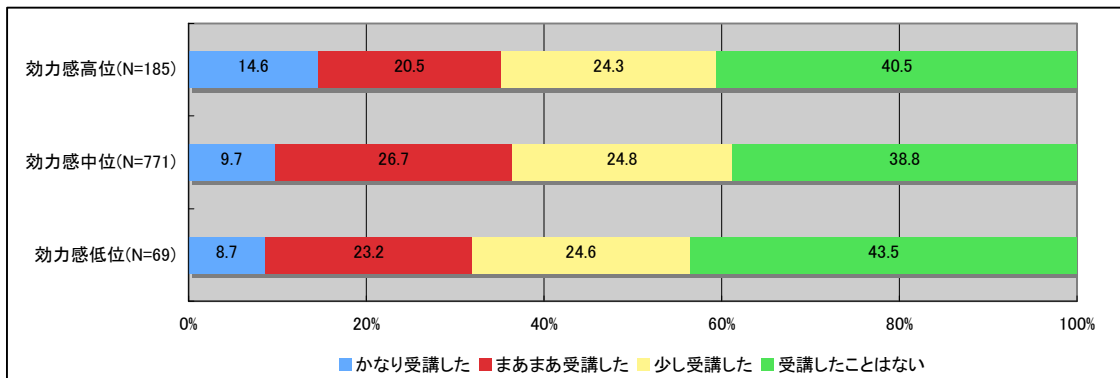


図7 キャリア形成支援のためのセミナー・講座の受講（3年）（N=1,025）

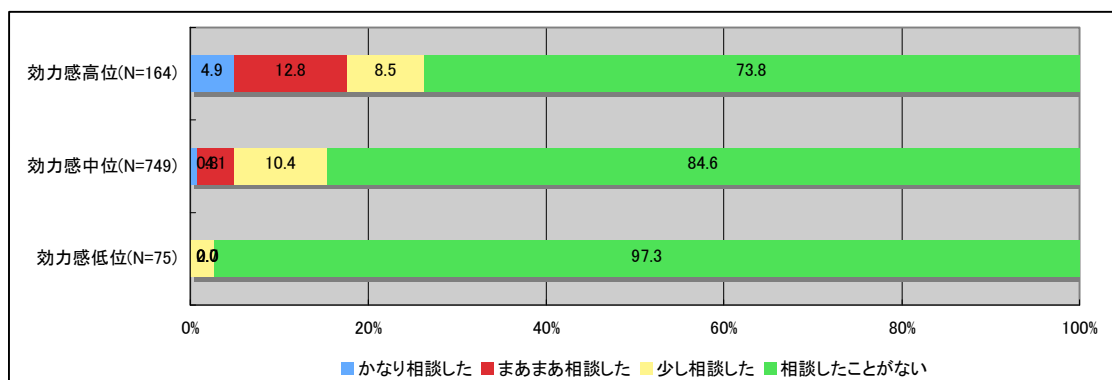


図 8 就職相談（1年）（N=988）

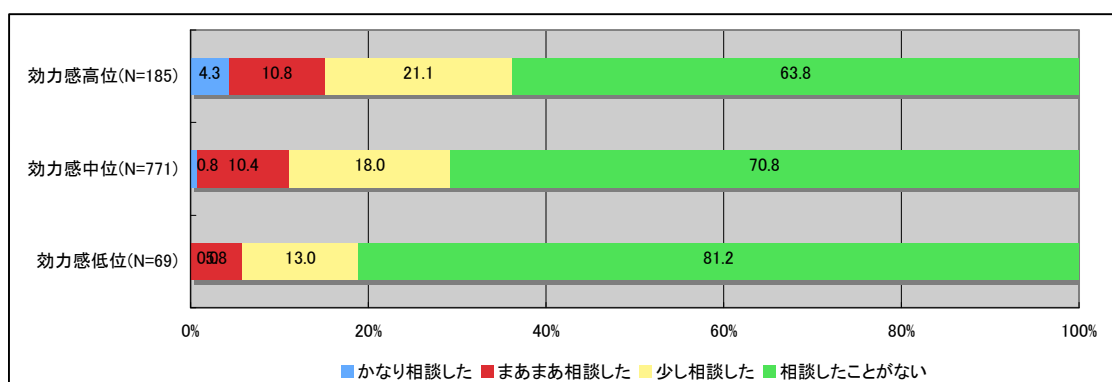


図 9 就職相談（3年）（N=1,025）

全体を通して、自己効力感低位群の経験率（「かなり」、「まあまあ」、「少し」を選択した比率）は少なく、高位群は多い傾向をみてとることができる。自己効力感が高いほどさまざまな行動をとりやすいという、理論にしたがった結果が認められたといえよう。

しかし個々の結果をみていくと、いくつかの特徴を指摘できる。入学後のインターンシップにおいては、1年生、3年生ともに、群間に明確な差が認められる。1年生の低位群では、参加者が0という点も特徴的といえるだろう。また、1年生高位群の経験率は、3年生低位群の経験率を超えている。なお、インターンシップは3年生で実施されることが多いが、このような1年生の結果は大学外でのものに参加していることを示しているのかもしれない。

次に、キャリア形成科目の受講においては、1年生で群間の違いが明確であるが、3年生ではそれほど大きな差は認めにくい。同様な傾向は、キャリア形成支援のためのセミナー・講座の受講にも認められる。3年生になると、卒業後のことも気になり始め、そのような場に足を運ばざるを得ない状況になるた

め、自己効力感以外の要因がこのような行動に大きく影響し始めるのではないかと考えられる。

最後に就職相談との関係では、インターンシップと同様に、1年生、3年生の両方において群間の差が明確である。一般的に、援助が必要と判断されるような学生の方が相談に来ないといわれるが、この結果はそれを裏付けるものといえよう。

以上の結果から、自己効力感と行動の関係については理論にしたがった関連性が認められ、やはり自己効力感低位群は行動が少なくなっていることが明らかとなった。しかし、キャリア形成科目やキャリア形成支援のためのセミナー・講座の受講においては、特に3年生で、自己効力感の低い者もそれに参加しているという結果も示された。そのため、これらの機会は自己効力感の低い者へアプローチするチャンスともいえよう。そこで3年生を対象として、それぞれの機会に対する評価について検討を加えてみたい。

3年生の経験者を対象とし、群別にその機会の影響についての回答を整理したものが以下である。

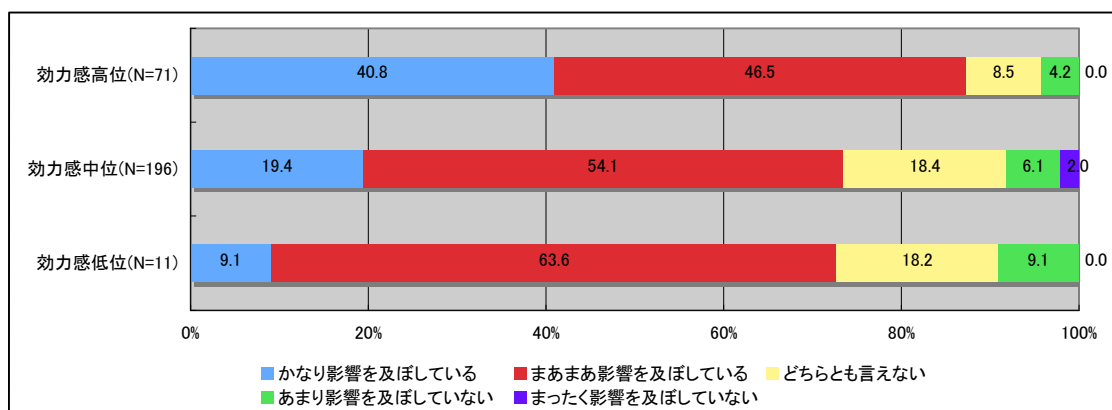


図 10 インターンシップの影響（3年）(Q10\_2(2)) (N=278)

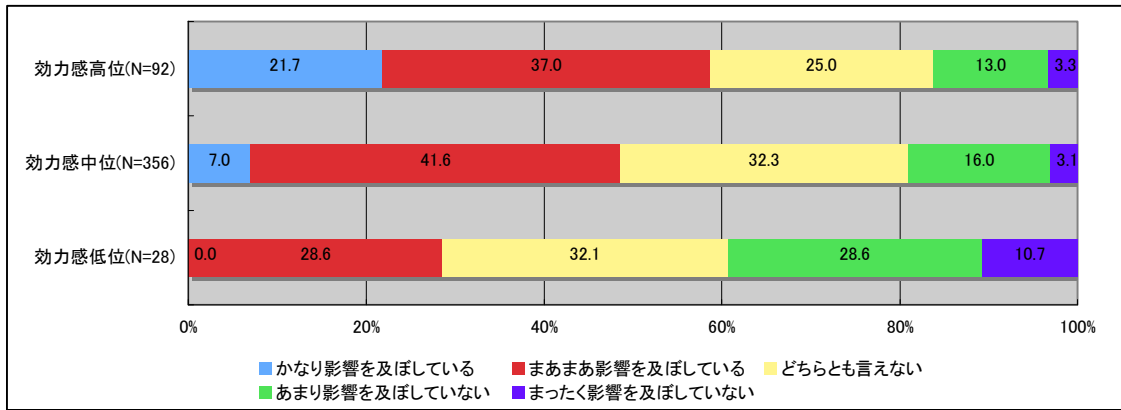


図 11 キャリア形成科目の受講の影響（3年）(Q16\_2) (N=476)

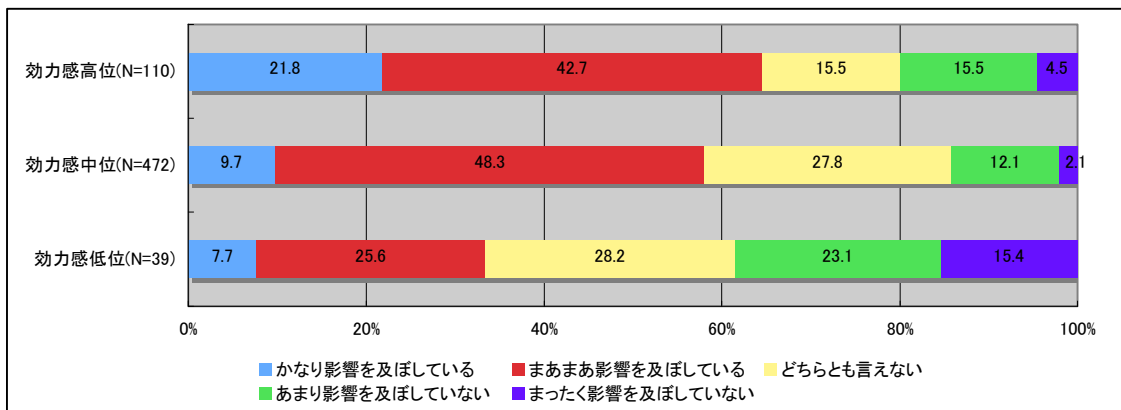


図 12 キャリア形成支援のためのセミナー・講座の受講の影響（3年）(Q17\_2) (N=621)

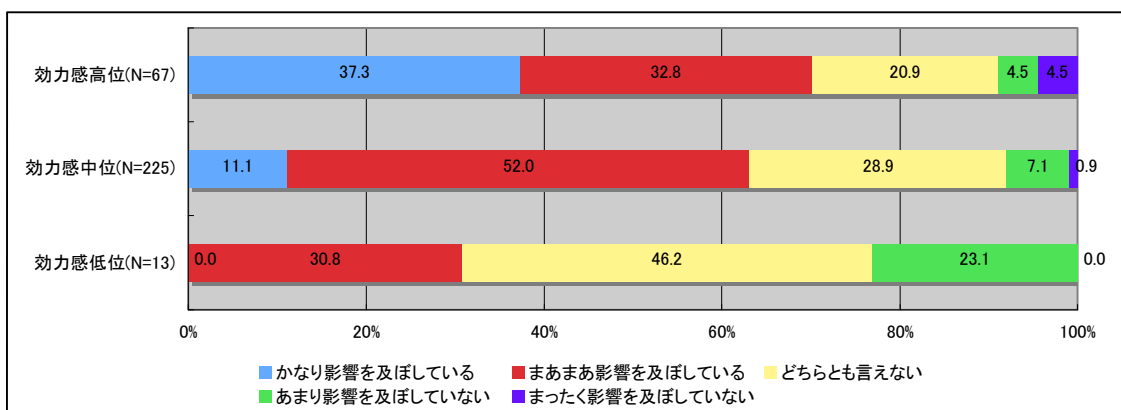


図 13 就職相談の影響（3年）(Q18\_3) (N=305)

これらの機会において、影響力が強い機会（「かなり影響を及ぼしている」と「まあまあ影響を及ぼしている」の比率が高い機会）と評価されているのはインターンシップであった。各群において70%以上の者が影響力が強かったとしている。

しかし、残りの3つの機会については、評価における群間差が大きめである。特に低位群においては、キャリア形成科目の受講と、キャリア形成支援のためのセミナー・講座の受講に対して、「あまり影響を及ぼしていない」「まったく影響を及ぼしていない」と評価する割合が40%程度を占め、他群のほぼ2倍となっている。この2つの機会は、先に見たように、自己効力感の低い者も比較的参加しているものである。この2つにおいて影響力の評価が低いということは、せっかくの機会が有用に機能していないといえる。さらに別な視点からすれば、その内容が自己効力感の高位、中位群向けの内容になっており、自己効力感における差をさらに拡大する機会になっているとも考えられる。

また、最も個性に対応した助言、援助ができ、その点で低位群にも適切に対応ができる可能性を含むはずの相談でも、それに対する評価は高くない。この項目において群間差が明らかに認められ、また高位群の方が強く影響力を認識しているということは、相談を受ける側が、自己効力感が高いという特定の個性のみに適合する対応をおこなっている、すなわち個性を無視しステレオタイプ的に対応している可能性が推測される。

自己効力感が低いことは、大ざっぱに言い換えれば自分に対する自信が低いということでもある。人数比率的には10%以下と決して多くはないが、最も支援が必要とされる対象とも考えられる。しかし現状では、残念ながらかれらの特徴に即応した指導・援助が行われているとは言い難い。1年生と3年生で、低位群の比率がほぼ同じということは、これらの機会が有用に機能していないことを暗に示しているのかもしれない。さらに、この状況を継続すると、低位群のみ取り残された存在になる可能性も無いとはいえない。

このような特徴をもつ低位群についてさらに詳しく理解するために、以下では学生生活の分析を行ってみたい。

#### 大学進学「最」重視点

まず、入学前の大学進学「最」重視点(Q1\_1)、および現在の「最」重視点(Q1\_2)と自己効力感の関連を検討した。

各群における選択率を示したものが下図である。入学前の大学進学「最」重視点の図14より、中位と高位群は、比較的類似した傾向にあるが、低位群はこれらとはかなり異なっていることを見てとることができる。「皆が行くから」「家族がすすめる」「その他」「特に理由はない」とする人数が他の群に比べ多く、これらの理由が全体の半数弱にも達していることが特徴といえよう。

図15に示される現在についても、中位と高位群は、比較的類似した傾向を示している。ところが「専門知識、技術の修得」が少なく、「特に理由はない」が多いといった点で、低位群はそれらとは違った傾向をもっているようである。

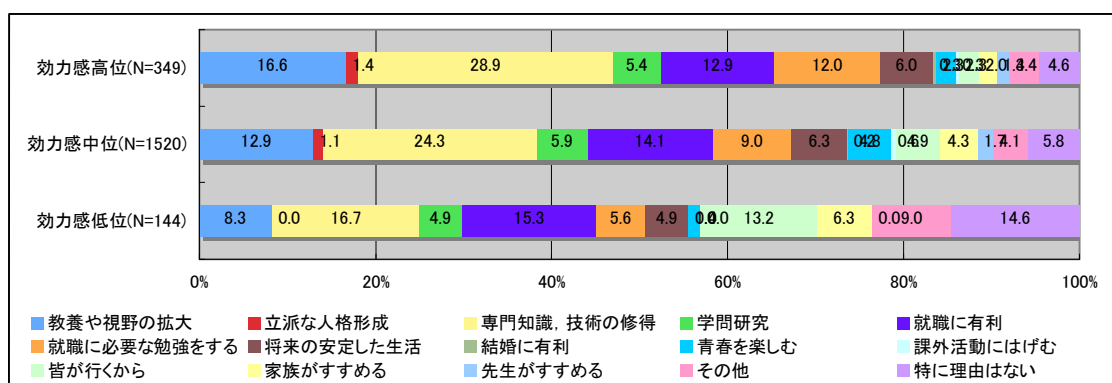


図14 入学前の大学進学「最」重視点(Q1\_1) (N=2,013)

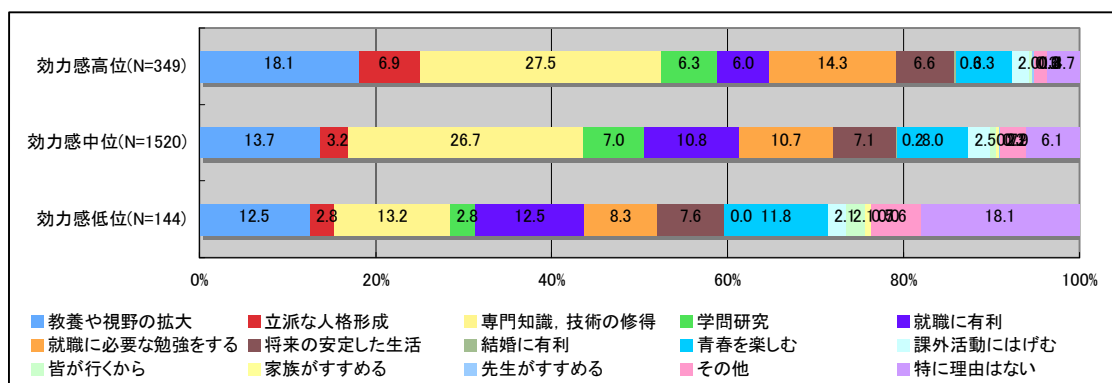


図15 現在の「最」重視点(Q1\_2) (N=2,013)

この結果より、自己効力感の低位群は、他の群とは異なった進学理由を持つ者が多く含まれていること、それは無目的的なものであることが多いこと、また現在においても無目的に通学している者が多いことなどといった特徴をもっているといえよう。無目的に進学したから自信がないのか、以前から自信がなかったため雰囲気流されて無目的に進学したのかという、これらの要因の関

係の仮定は困難であるが、それらの間には何らかの関係があると推測することは難しくない。これは、一方では高校までの指導のあり方に対する再考を求める結果といえ、他方では、特に自己効力感の低い学生に対しては、低学年次からの支援が必要であることを示しているといえよう。

#### 大学での学びの目的

大学での学びの目的(Q2)について、学年、自己効力感の群別に項目平均値を算出した。その結果を図 16 に示す。なお得点は、高いほど「あてはまる」程度が強いことを示している。

図から明らかなように、「なんとなく勉強しているだけだ」「義務的に勉強している」「ほかにやりたいことがなかったから」の3項目は、他の項目とは逆転関係にあるが、一貫してグラフの線は平行的に推移している。そして、その程度を決定しているのは、学年ではなく自己効力感であることが読みとれよう。すなわち、学年に関係なく、自己効力感の高い群はさまざまな学ぶ理由を肯定することができ、逆に低い群は積極的な学ぶ理由付けができず、「なんとなく勉強しているだけだ」「義務的に勉強している」「ほかにやりたいことがなかったから」などを肯定する結果になっているといえよう。なお、これらの3項目に関して、3年低位群の方が1年低位群よりもより肯定する傾向があることは注目しておくべきであろう。この差が年次進行によって生じているのであれば、適当な介入が必要になると考えられる。

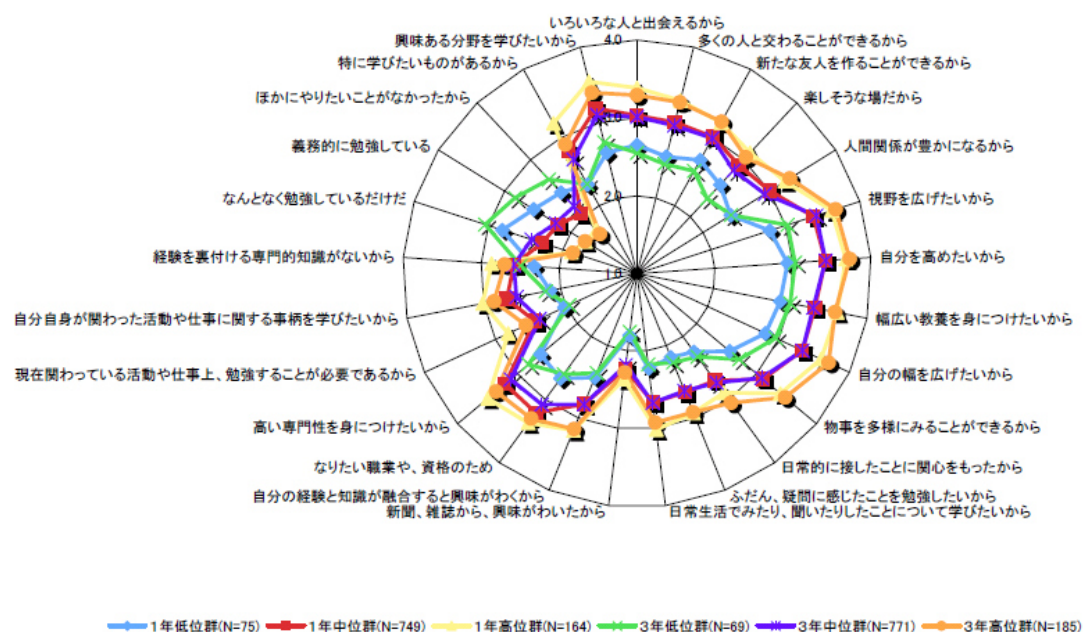


図 16 大学での学びの目的(Q2)の学年および効力感別平均値 (N=2, 013)

### 日常的活動と評価

各群の日々の生活を垣間見るために、過去一年間に活動に費やした時間に関する設問(Q5)について分析を行った。その結果の概要は、多くの活動項目で自己効力感と活動時間の間に一定の関係が認められた。そのほとんどは、低位群ほど時間が短いという結果であった。このような傾向をみせる代表的な活動内容には、「授業とは関係のない勉強を自主的にする」、「勉強のための本（新書や専門書など）を読む」、「新聞を読む」などといった学習（特に自主的なもの）や、「異性の友達と交際する」、「コンパや懇親会などに参加する」、「家庭教師や塾の講師以外のアルバイトをする」などといった交友的、社会関係的活動であった。下位群ほど時間が長い傾向が認められた項目は、「インターネットサーフィンをする」であった。また、「大学で授業や実験に参加する」や「テレビをみている」といった活動については、自己効力感と活動時間の間の明確な関連性は認めにくかった。

さらに、そのような活動が、自分の将来の仕事や人生設計にどの程度貢献したという設問(Q6)に対する回答を図 17 にまとめた（ただし、経験者数が極めて

少ない「家庭教師や塾の講師のアルバイトをする」という設問は除いている)。なお、「どちらとも言えない」という回答の場合が3点であり、点数が高いほど貢献の程度を強く、低いほど貢献していないと認識していることを示している。

ここでも、学年よりも自己効力感の差によって認識の程度が違っていることを把握することができる。同じような活動を行ったとしても、自己効力感の高い者は、それを将来の仕事や人生設計により貢献するものと認識する。しかしながら自己効力感の低い者は、その貢献の程度をより低めに、「どちらとも言えない」程度と認識している。

以上の結果を簡単にまとめてみると、自己効力感の低い者は高い者よりも、特に自主的な学習活動や交友的、社会関係的活動が少ない。また、さまざまな活動全般を通してみても、「インターネットサーフィンをする」以外については、多く時間をかけているような活動は認められない。さらに活動をしていても、活動に対しての意味づけが低いという特徴を指摘できる。

もし、日常的にこのようなサイクルが機能しているとすれば、自己効力感の低い者においては、日常的な経験から自己効力感が自然に育ってくるとは考えにくい。また、自己効力感の高低による差は、日々の生活の中で拡大していると考えられる。やはり、自己効力感の低位群には意図的な介入が必要であろう。

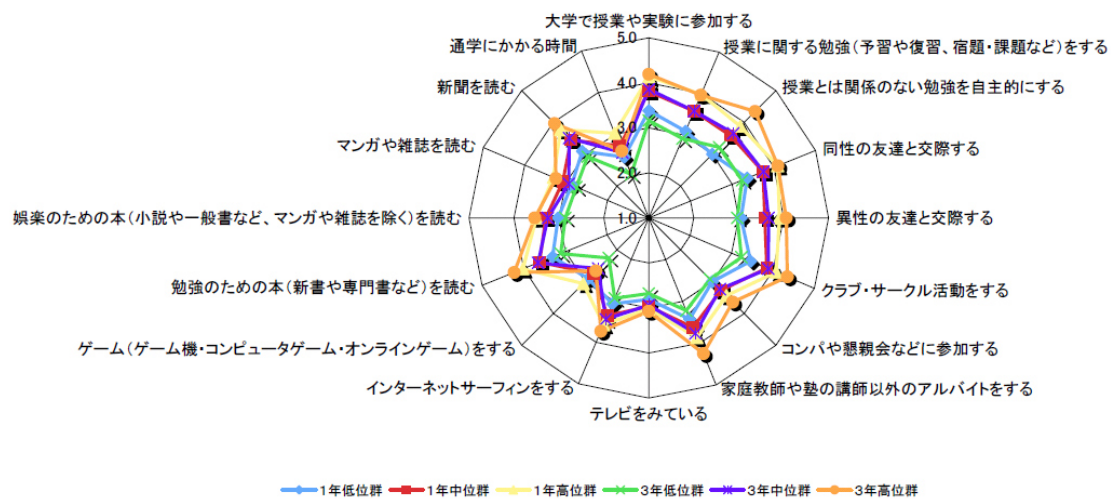


図 17 Q5 で用いられた活動が、将来の仕事や人生設計に貢献した程度(Q6)の学年および効力感別平均値 (N=2, 013 を対象とするが、経験者数は項目ごとで異なっている)

### 大学生生活の重点

さらに日常生活について分析するために、大学生生活の重点(Q7)についての分析を行った。学年別、自己効力感の群別に整理したものが図 18 である。なお、分析の観点の都合により、他図とは群の記載順が異なっている。

この図 18 では、各群の 1 年と 3 年が上下に配置されているが、群ごとに類似した回答比率になっていることが読みとれるであろう。しかし、低位群のみは学年間に際立った違いが認められる。低位群 1 年生の回答比率は、「何となく」という回答が多いものの、「クラブ第一」や「豊かな人間関係」といった項目への回答も多く、高位、中位群と似た傾向ともいえよう。しかし、3 年生の回答では、これらの比率は下がり、「何事もほどほどに」や「何となく」が増加している。

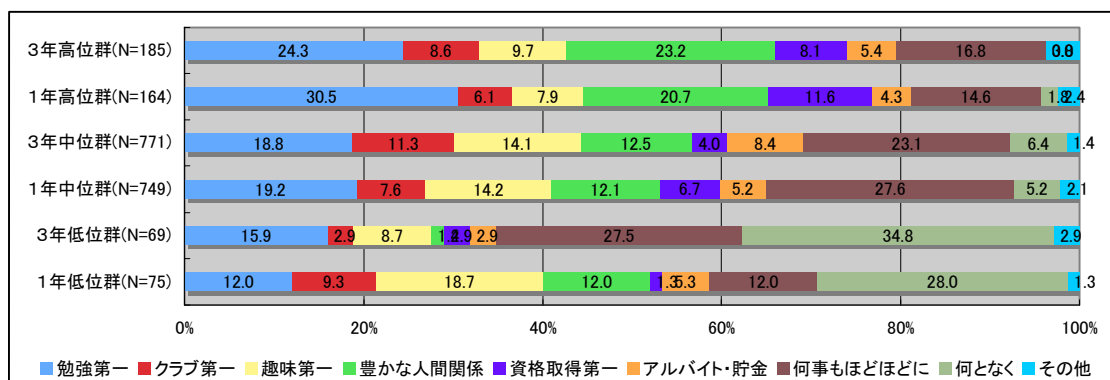


図 18 大学生生活の重点(Q7) (N=2, 013)

今回は縦断調査ではないため、低位群における学年の差を発達的变化と見なすことは難しい。しかし、先に検討した日常生活における活動状況やそれに対する自己評価の傾向、自己効力感自体はあまり変化しそうにないことを考え合わせると、今回調査対象となった1年生も、2年後には現在の3年生のようになってしまうのではないかという推測も空論とは言い難いであろう。

すなわち、低位群とはいえ1年生でもあり、まだまだ大学時代にやりたいことという理想も残っている。これが調査結果にあらわれている。しかし、かれらは自分に自信がないことに加え、交友的、社会関係的活動は少な目である。さらに、その活動経験に積極的に意味を持たせない認知的傾向を持っている。そのため、このような活動は次第に少なくなり、生活の指針の変更が必要となる。その受け皿となる指針が、主に「何事もほどほどに」であり、これらの回答比率が増加する。このような過程に対する推測もできるのではないだろうか。このように考えると、「何事もほどほどに」という回答が持っている意味は、自己効力感の高位群、中位群とは異なっていると解釈すべきかもしれない。

このような推論が妥当なものか否かについては今後の研究が必要であるが、低学年次に行っておくことが望ましいキャリア教育の内容を検討するためには、有用な情報といえるかもしれない。

### 社会性形成に関する支援

これまでの分析において、自己効力感低位群は、交友的、社会関係的活動が少ないという結果が示された。本調査には、このような活動の側面と関連するボランティア(Q9)、参加型授業に関する設問(Q15)がある。そこで、これらの設問に関する分析を行う。

まずボランティアであるが、多くの場合で多様な人との関わりが生ずるであろう。そのため、交友的、社会関係的活動にとって有用な練習機会となりうる可能性があると考えられる。大学入学後のボランティア経験(Q19\_1)について、学年・群別に整理したものが図19である(なおこの分析結果は、学年で大きく異なった傾向が認められるので、学年別に示す)。さらに、その経験の影響についての評価(Q19\_2)も図示した。

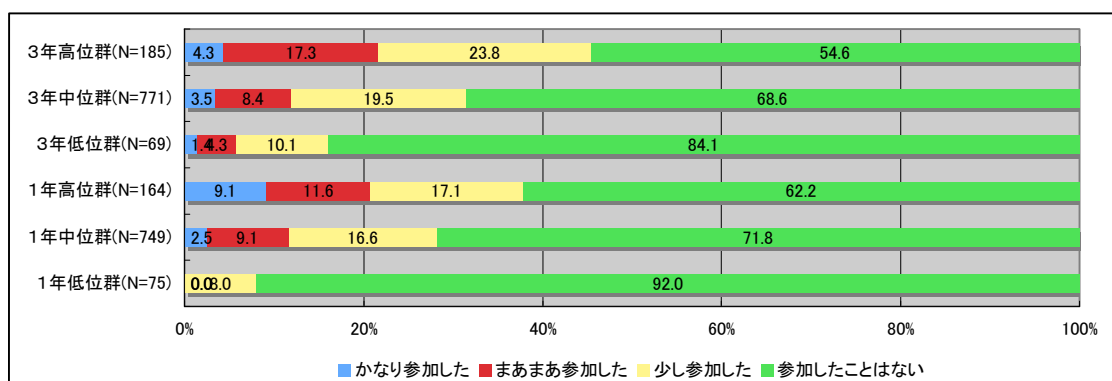


図19 大学入学後のボランティア経験(Q19\_1) (N=2, 013)

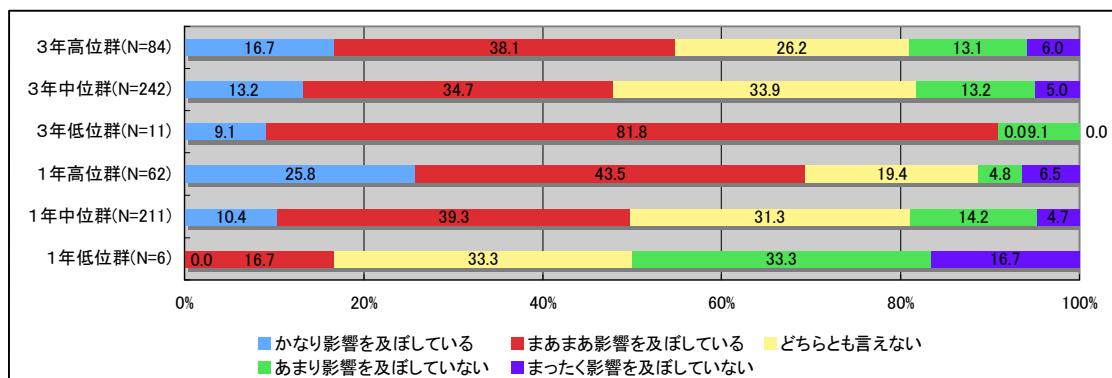


図20 ボランティア経験の影響(Q19\_2) (経験があるもののみが分析対象)

これらの結果より、やはり自己効力感とボランティアへの参加という活動の間には関係がみとれる。自己効力感低位群は、このような活動への参加が少ない。しかし、その影響については興味深い結果が得られた。人数は少ないものの、3年生低位群では、かなり肯定的にとらえられている。しかし、1年生低位群では類似した傾向は認められない。これは、1年生には「少し参加した」者しか含まれていないからかもしれない。いずれにしても、人数が少ないため慎重な解釈が必要であり今後の研究が待たれるが、重視すべき経験であるかも

しれない。

次に、参加型授業について(Q15\_1 および Q15\_2)の結果を整理した。これを下図に示す。

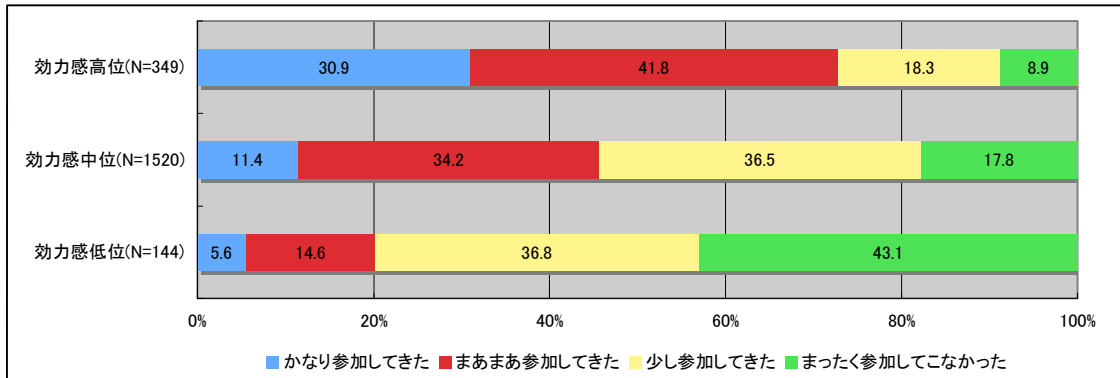


図 21 参加型授業への参加(Q15\_1) (N=2, 013)

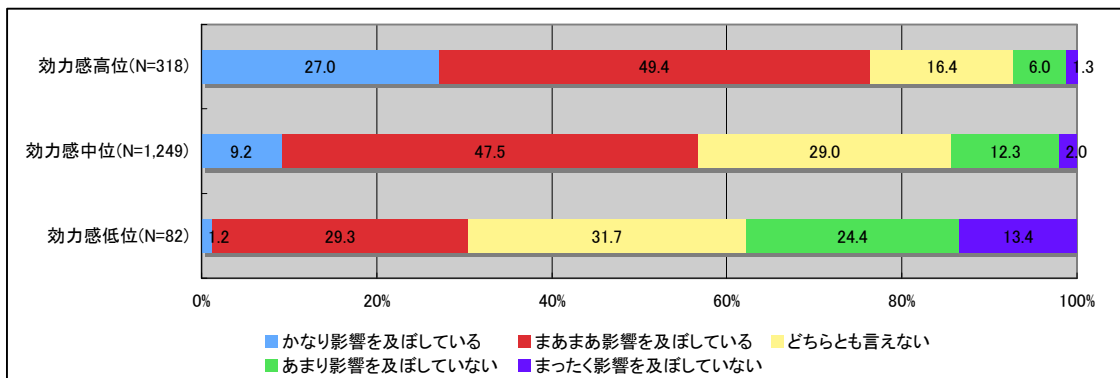


図 22 参加型授業の影響(Q15\_2) (経験があるもののみが分析対象)

参加型授業への参加においても、自己効力感高位群に多く、低位群に少ないという傾向は引き続き認められた。しかし、これまでの分析であつてきたどの項目よりも参加の程度は高い。交友的、社会関係的活動へのきっかけとしての有用性は十分にあるといえよう。しかしながら、その影響については、これまでの分析における傾向と類似したものであった。やはり、自己効力低位群に対応した、何らかの工夫が求められるといえよう。

### 希望する雇用形態

就職時に希望する雇用形態(Q26)について、学年別、自己効力感別に結果を整理したものが図 23 である。

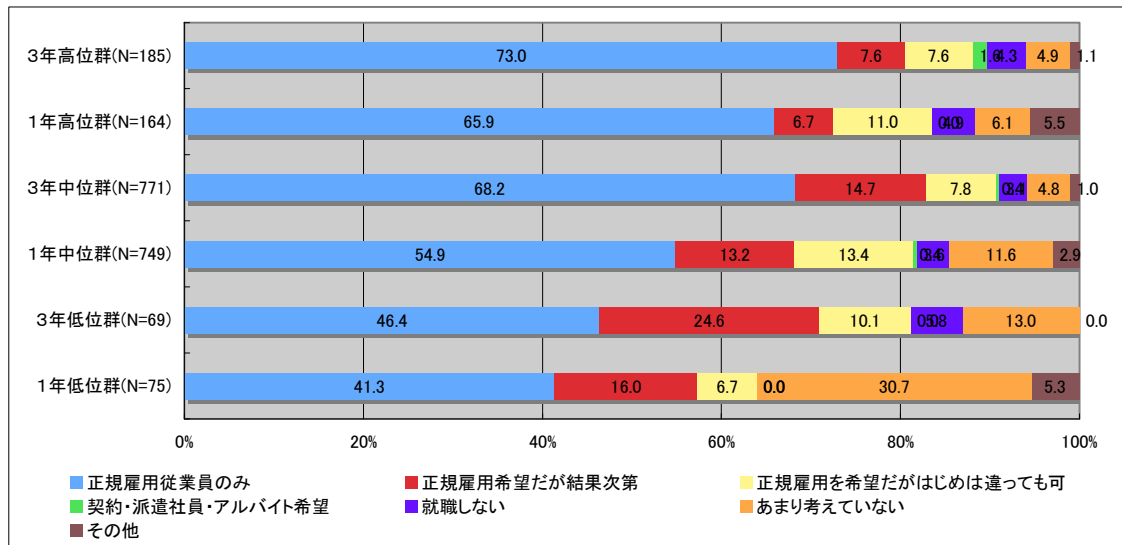


図 23 希望する雇用形態(Q26) (N=2, 013)

この図より、学年別、自己効力感の群別に若干の差異があることがみととれる。その中で低位群に着目すると、1年、3年のいずれにおいても「正規雇用の従業員以外はまったく考えられない」という希望を持つ率が少ない。また、1年生において「あまり考えていない」という回答が約30%を占めるが、3年生でも他群に比較して多い。さらに、3年生において「正規雇用の従業員を希望するが、就職活動の結果次第では、契約・派遣社員やアルバイト、フリーターになるかもしれない」とする者が多い。低位群には無目的進学者が多いという結果が明らかになっているが、この点と自己効力感が低い、すなわち自信がないということを考え合わせると、以上のような結果は納得できるものといえよう。

加えて、さらに注目すべき点として、自己効力感の低位群には「契約・派遣社員やアルバイト、フリーターがいい」とする者は皆無であるということをおげることができる。このような希望を持つ者は、高位群、中位群に若干みられるが、低位群にはみられないのである。しかし、「正規雇用の従業員を希望するが、就職活動の結果次第では、契約・派遣社員やアルバイト、フリーターになるかもしれない」とする者は多い。すなわち、高位群、中位群には、主体的に希望する雇用形態として契約・派遣社員、アルバイト、フリーターを位置づけている者も含まれるが、低位群では、仕方なく選ぶ雇用形態といえよう。これは最も懸念される選択の仕方であり、支援者には留意が求められる点である。

## まとめ

今回の分析では、特に「進路選択に対する自己効力感」の低い者に焦点を当てて、かれらの特徴を分析してきた。主な特徴として、以下のような点を指摘できよう。

- ・ 性、学年を問わず、約7%前後の割合で存在している。
- ・ 学習内容が将来の職業と関連がうすい所属の場合、若干含まれる比率が増える。
- ・ 無目的に進学した者が多く、現在も無目的に学習を続けている。
- ・ キャリアに関連するイベントのみならず、日常的な活動においても参加する率は少ない。さらに活動をして、それに対しての意味づけが低い。
- ・ 就職時の雇用形態として、契約・派遣社員、アルバイト、フリーターなどを望んでいない。

このような特徴を自己効力感の低い者が持っていることを踏まえて、現在の教育（キャリア教育）を検討してみると、その問題点として、このような個性に対応した指導ができていないことを指摘できよう。また、ある一定レベルを想定した一斉指導は、自己効力感による差を拡大する可能性も示唆された。ところが、個別対応である相談においてもその評価は低く、現在のところは有効に機能しているとは言い難い。今回の結果を見る限り、ボランティア活動については考慮の余地があるものの、かれらに有用な援助を見出すことはできなかった。

自己効力感の低い者は、独特な特徴をもつ存在といえる。しかし、全体の約7%程度ということから、平均や多数の傾向に目を奪われると見逃してしまう存在でもある。このような少数派の存在をどのように考え、また対応をしていくのかという点についての議論が求められよう。